

氏名	内藤良
	ないとうりょう
学位の種類	医学博士
学位記番号	論医博第2号
学位授与の日付	昭和36年6月20日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	喉頭結核症の発生ならびに進展に及ぼす甲状腺ホルモンの影響に関する実験的研究
論文調査委員	(主査) 教授 後藤光治 教授 鈴江 懐 教授 岡本耕造

論文内容の要旨

結核病変と甲状腺機能との関係については古来多くの研究がある。しかしその相関関係については学者間の意見は必ずしも一致していない。著者は喉頭結核におけるこれらの関係について追及した。

著者は白色雄性家兎を使用し、これに牛型菌を用いて喉頭結核を実験的に惹起せしめ、これに甲状腺ホルモンを連続投与しあるいは甲状腺を剔出してその影響を観察した。実験群をまず2大群に分けた。すなわち1は上喉頭動脈より感染せしめる血行性感染群、他は経気管的に喉頭粘膜上皮に菌液を貼塗感染せしめる管内性感染群である。さらに各群を初感染群と再感染群とに分けた。これを一定の間隔をおいて順次致死せしめ、連続切片を製作観察を行った。その成績を要約すれば次のごとくである。

1) 血行性再感染群において、病変は剔出群では漿液性炎で、注射群では漿液性浸出性炎で始まる。注射群においては血栓形成、血管内膜炎等の血管系変化が認められる。剔出群においては血管系の変化は軽微であり、10日目に類上皮細胞が出現する。注射群では類上皮細胞は出現せず、所属淋巴節の単球反応にとどまる。

2) 血行性初感染群ではこれに反し両群ともに病変は漿液性炎に始まり、逐次定型的結核性増殖炎へと進展する。ことに注射群においては10日目に至り、急激に多数の浸出性、増殖性結核性病巣を形成する。かくのごとき早期かつ激しい結核性病変は今までの実験例では見ないところである。剔出群では浸出性炎症像は軽微であり、病像進展の時間的因子は遅延している。

3) 管内性再感染実験群では、病変は終始漿液性炎を主体とする。しかして特有なる増殖性結核性病巣を形成しない。病変は粘膜上皮層および上皮下結合組織、筋間質に存在し、粘膜上皮移行部は膨化し、多核白血球の浸潤がある。所属淋巴節には著変がない。病変の程度は注射群がわずかに増強されて発現する。

4) 管内性初感染群においては、病変は終始漿液性炎にとどまり、病像の進展を見ないで治癒的経過をとる。上皮層の膨化がなく、細胞浸潤を認めるが、その程度および経過は対照実験群と大差を認めない。しかし所属淋巴節は次第に定型的類上皮細胞結節へと進展する。

以上からして、甲状腺ホルモン連続注射は喉頭における組織アレルギー反応をわずかに増強し、甲状腺剔出はこれを抑制する傾向を示す。また細小血管より組織内への菌侵入は、両者ともにこれを助長するが経上皮の侵入にはなんらの影響をもおよぼさない。しかして甲状腺剔出は病変の時間的因子を遷延せしめるものと思はれる。

論文審査の結果の要旨

結核病変と甲状腺機能との関係については相当多くの研究がある。しかし、甲状腺ホルモンの喉頭結核症におよぼす影響に関する研究は皆無である。著者は甲状腺剔出ならびに甲状腺ホルモン連続注射が喉頭結核症の発生ならびに進展におよぼす影響につき実験を行ない、以下の結論を得た。

- 1) 甲状腺ホルモン連続注射は喉頭における組織アレルギー性反応を軽度に増強する。
- 2) 甲状腺剔出は喉頭における同反応を軽度に抑制する。
- 3) 甲状腺ホルモン連続注射および甲状腺剔出はともに細小血管部における血中より組織内への菌侵入を助長する。ただし、その侵入度は後者よりも前者に大である。
- 4) 甲状腺ホルモン連続注射および甲状腺剔出はともに経上皮の菌侵入には影響をおよぼさない。
- 5) 甲状腺剔出は喉頭結核病変の進行に遷延的影響をおよぼす。

かように、本研究は喉頭結核の知見に貢献するところが少なくない。したがって、本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。